

CASE STUDY

自立を目指す女性のための学び 直しを通じたキャリア支援事業

仙台市母子家庭相談支援センター 所長 川端千尋

公益財団法人せんだい男女共同参画財団（以下、財団）では、10代の頃に十分な学びの経験が得られなかったなど、様々な困難により就業や転職に影響を受けている女性を対象とした学び直し事業を実施しています。2018年度に文部科学省の実証事業として採択されたことに始まり、2021年度からは仙台市の受託事業となりました。新たな支援との組み合わせや学習プログラムの拡充など、形を変えながら継続し、今年度で6年目を迎えています。

支援センター（仙台市からの受託）で支援しているシングルマザーの状況です。就業や自立を目指して相談にいらつやる方の中には、高校中退や中卒の方、未婚で出産を経験した人も少なくありません。一般的に女性は出産を機に仕事を辞めてしまうと、正社員にはなかなか戻れませんが、シングルマザーはさらに厳しく、働いていても低収入で、自立が困難な経済状況が見受けられます。もう一つは、若年無業のシングル女性たちの状況です。彼女たちを対象とした自立支援事業では、仕事が続かない、人間関係が原因で引きこもっているなどの悩みもお聞きしています。また、小中学校で不登校だったところからずっと引きこもりというケースも少

なくありません。しかし、若年女性の場合「家事手伝い」と呼ばれることで困難が可視化されず、社会的支援にながりにくい状況があります。

これらのことから、女性は年代や置かれた状況に関わらず、社会の構造的な問題が原因で生きづらさを抱え、貧困に陥るリスクが高いということを改めて知ることになりました。この問題を解消していくためには、大局的には社会の構造的な課題を解決する必要があります。一方で、既に困難に陥ってしまったっている女性たちが自立に向かうためには、自分の生き方（キャリア）を自身で選択していく力をつけることが必要だと考えました。その力をつけるために重要だと考えたのが、自分

公益財団法人せんだい男女共同参画財団「男女平等のまち・仙台」の実現を目指して、女性が抱える困難の背景にある構造を明らかにするとともに、女性の自己決定と行動の重要性を踏まえて様々な取り組みを行っている。指定管理者として運営している仙台市男女共同参画推進センター「エル・ソーラ仙台」において、女性相談や仙台市母子家庭相談支援センター等の相談事業を実施している。

を否定せず、ありのままの自分を認める「自己肯定感」を高めることです。

この支援プログラムは、伴走型のキャリアアカウンセリングと個別にカスタマイズした学習支援の二つを主にしています。0歳から小学1年生までのお子さんをお預かりする託児サービスもあり、支援は全て無料です。DVや性暴力被害などによる傷つき体験がある女性が安心して利用できるように配慮して、学習支援者を含め、スタッフは全員女性としています。

「キャリアアカウンセリング」では、財団の相談支援員が利用者に寄り添い、その背景も含めて総合的に支援しています。そのため大切にしているのが「人生の棚卸」です。傷つき体験のある方が、過去のバワハラやいじめ、DVなどの体験を振り返るのはつらいことです。それでも、一緒に棚卸をすることで、客観的に自分自身を振り返ることができるようになっていきます。「自分の持っている力を再確認する。これまでの経験が積み重なって今に至る自分の人生を、肯定的にとらえられるようになる。そして、徐々に自分をポジティブに受け止められるようになっていく」。そのよう

な経過を歩みながら、仕事だけではなく今後の生き方も含めて考えていきます。

キャリアアカウンセリングは何度でも利用できますが、キャリア目標を決定するために、支援プログラムの最初に必ず受けていただいています。この目標がその後の支援の道しるべともなり、本人の希望する学習内容の確認や学習のモチベーションを維持していくためにも、とても重要な役割を担います。

「個別学習支援」では、学習を始める前に「学習カウンセリング」をしませ。ここでは、キャリア目標に向かってどんな学習をしたのか、どんなことが苦手で克服したいかと思っっているのかなど本人の希望を確認します。それを元に科目・内容、支援期間などを計画し、学習を進めていきます。昨年度からは、いわゆる中学校の5教科などの他にパソコン操作の基礎を学ぶプログラムも追加しました。この支援は、一般財団法人学習能力開発財団が担当しています。この団体は、発達障害児の学習支援の経験から、文字では頭に入っこないけれど耳からなら入ってくる、動画や映像なら理解できるというような一人ひとりの特性に合わせた

学びを提供することができます。また、東日本大震災で親を亡くした子どもも学習支援も行っており、利用者の困難な状況に寄り添うことができるという面でも、非常に心強いパートナーであると感じています。

前述の二つの支援の他、最初に加えたプログラムはリプロダクティブ・ヘルス/ライツの視点を盛り込んだセミナーでした。不登校だった方たちは、保健の授業や性教育を受ける機会もなく、自分を大切にするという感覚も持ちにくかったのではないかとということも感じています。

その後も、利用者の状況やニーズに合わせて形を変えながら、生きづらさ・働きづらさを感じている女性向けのプログラム、就業体験などの支援に つないでいます。

文部科学省の実証事業（3年間）における実施状況は次のとおりです。

「利用者」は、年毎に12～13名。その方々の家族形態は、シングルマザー、若年無業のシングル女性の合計で77・4%。また、最終学歴は、中卒、高校中退、通信制も含めた高卒で83・9%となっています。

「キャリア目標」(図1)は、看護師などの資格取得や高卒認定試験受験といった学歴の更新などの具体的なことから、**地力***の向上など、内容・レベル感ともに様々です。自己肯定感の高揚を目指して始めた支援事業でしたが、学力不足そのものが生きづらさ、働きづらさに直結していることが浮き彫りとなるとともに、その手当ができれば、もっとスムーズに働けるケースもあるということが分かりました。

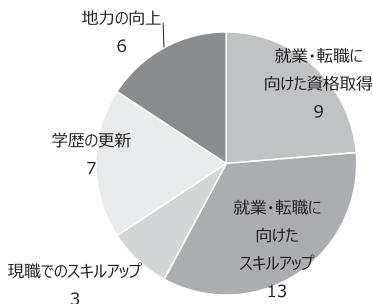
*地力(じりき)とは、財団が名付けたもので、次のような日常生活の場面を円滑に送るための力のこと。
 ・子どもの入学案内を読んでも、内容が呑み込めない
 ・飲食店でのアルバイトで大盛の量を聞かれたが、5割増しの概念がわからない
 ・消費税や日割りの計算ができない

「学習科目」(図2)は、国語と算数・数学を選択している人が多くなっています。この国語の学び直しが特徴的です。例えば、会社に提出する報告書に自信がないという方や、働くためにコミュニケーション力を上げたい、気持ちの伝え方を学びたいという方も学習しています。文章を理解する読解力は、他の科目の基礎ともなっており、国語の力がついていないことが学習全

般に影響しています。また、ほとんどの方が小学校から中学校レベルの内容を学習しています。
 「自己肯定感等の変化」(図3)は、支援の初回と最後に実施した各意欲を測るための20項目のチェックの結果を

キャリア目標

2018～2020年度の実施状況 ※3年間の延べ数

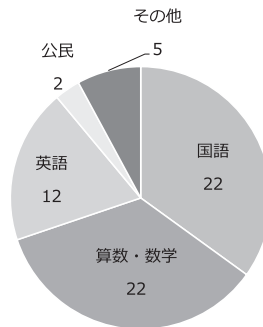


(図1)

学習科目

2018～2020年度の実施状況 ※3年間の延べ数

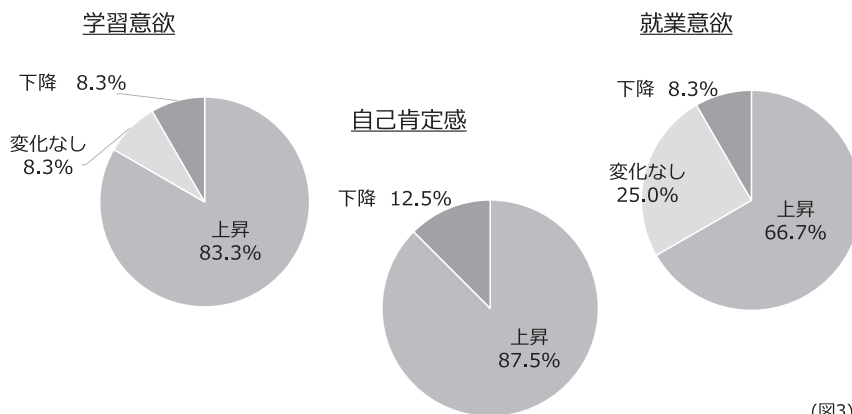
- その他：政治経済、理科、生物、日本史、秘書検定
- 複数科目目の学習を含む。ほとんどが小・中学校の内容。



(図2)

自己肯定感等の変化

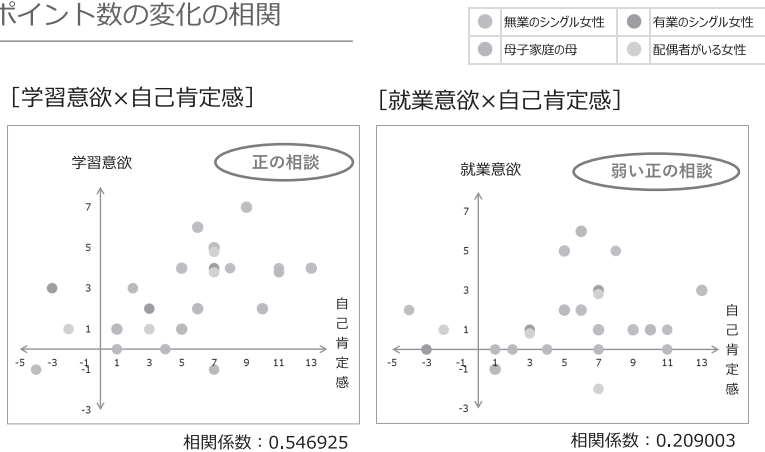
※初回と最終回を比較



(図3)

比較したものです。学習意欲は83・3%、自己肯定感は87・5%、就業意欲は66・7%が上昇しました。なお、就業意欲の上昇が若干低く見えるのは、もともとのポイントが満点など、高かったために変化なしとなった方が、特にシングルマザーに多かったことによるもので

ポイント数の変化の相関



す。それぞれの「ポイント数の変化の相関」(図4)を見ると、学習意欲と自己肯定感の変化には正の相関が、就業意欲と自己肯定感の変化には弱い正の相関があることが明らかになりました。

この結果から、学び直しが自己肯定感の高揚に有効であること、自立に向

(図4)

けた足がかりとなることが証明できました。加えて、キャリアアカウンセリングや学習の身身だけでなく、相談支援員や学習支援講師との日常会話も含めた関わり自体が利用者に好影響を与えたものととらえています。

また、学習を通して「やればできる」経験を積むことで、ここまでしかできないと決めつけていたキャリア感の天井を、もつとやれるかもしれない、挑戦したいと押し上げていく変化も見えています。

一方で、キャリアアカウンセリングから、困難に陥る背景には、次のようなジェンダー問題があることが浮き彫りとなりました。

- ① 「幼少期からの教育におけるジェンダー格差」
子育てにおけるジェンダー意識が子どもの人生にも影響を及ぼしている。
・ 親から「女は手に職をつけねばいい、勉強は必要ない」と言われた
・ 兄や弟は親から期待されて、希望する大学に進学させてもらえなければ、自分は進学させてもらえなかった
・ 消費税の計算、時間の計算等、基礎学力の不足が生活や働くうえでのハンデとなる
・ 特に読解力の未熟さは、コミュニケーションや対人関係の苦手意識につながる
- ② 「からだや心の不調」
虐待やDV・性暴力被害など、様々な傷つきから、からだや心の不調を抱えている人も少なくない。
- ③ 「シングルマザー」
いくつもの役割をひとりで背負っており、非正規雇用から安定した仕事にキャリアアップしたくても、目の前の生活に必死で自分と向き合う余裕がない。
- ④ 「若年のシングル女性」
不登校や引きこもりを経験している人が少なくない。引きこもりの状態にあっても、社会的にも家族からも「家事手伝い」とすり替えられ、支援からこぼれ落ちてしまう。
- ⑤ 「女性特有のジェンダー意識に起因する『揺らぎ』」
「妻や母は自分のことより家族のことを優先すべき」というジェンダー意識により、自分のキャリアや次の一歩を踏み出す時期を決められない。自分の存在意義を見出すことができず、男

性に全面的に依存したり、自分のからだを大切にする意識が持てない。

女性たちが困難に陥る背景には、「自己責任」では片づけられない社会的・構造的な課題があります。また、親世代のジェンダー意識が子どもへの人生さらにその子ども世代にも大きく影響していくという負の連鎖を断ち切ることが大切と考えます。個人の学び直しだけでは解決できないこれらの課題に向けて取り組む重要性についても、改めて実感しているところです。

これまでの経験により、相談支援事業の中で、相談支援員が女性たちのニーズを掘り起こし、キャリアの転機となるタイムミングで声がけをするなど、「キャリア支援に有効な手段として個別学習を提示する」視点が根付きました。これらを活かし昨年度からは、シングルマザーを対象に、キャリアアカウンセリングと並行して支援する個別パソコン基礎講習を開始しています。引き続き、学び直し事業について継続的なキャリア支援としての定着を図るとともに、財団のミッションであるジェンダー平等の実現にむけて、地域の様々な組織と協力しながら取り組みを進めて参りたいと思います。

『公民館の使命』

著／朱膳寺 宏一 2016年12月発行 B5判 192頁

定価 2200円（本体 2000円＋税）送料 310円（在庫僅少 日本青年館に直接申込をお願いします）

朱膳寺 春三（元宮城県本吉町公民館長：現気仙沼市）・朱膳寺 宏一（元千葉県北部公民館長、元千葉県公民館連絡協議会会長）親子で公民館活動に邁進してきた朱膳寺宏一さんの集大成。

『公民館総論』（公民館の基礎的なことを学ぶ）

『特別企画』（銭谷元文部科学事務次官 井内慶次郎氏と鈴木健次郎氏の想い出を語る、社会教育一回顧と展望—井内慶次郎さん）

『公民館の心』（公民館の源流を問う）

『公民館私感 公民館サークル・公民館運営審議会など』

（なぜ教育委員会に公民館と職員が必要なのか、公民館職員の研修、映画「公民館」の秘話、公民館有料化を考える、サークルの私塾化傾向と新たな課題、益々期待される公民館運営審議会）

『私の社会教育手帳』（社会教育行政と公民館の実践から、「地域」という概念とその重要性、生涯学習を考える、家庭教育について、改めて公民館の原点とは、地域に支えられ）

『朱膳寺春三論集—社会教育実践十八年のあゆみ』

（公民館と共に歩んだ道〈次官通牒以後、公民館の誕生、公民館の構想〉、創設期における公民館について—社会教育法制定まで—〈公民館の地位と役割、公民館の事業、公民館の経費、社会教育法登場前夜〉、公民館の隆盛期を迎えて—社会教育法から町村合併まで—〈分館の経営、公民館建設〉、風にそよぐ公民館—町村合併以後—〈公民館は墓、町村合併の功罪〉、公民館の道は遠かった—公民館十八年のあとを顧みて—〈国民共通の広場を、東北の公民館〉）

上記の書籍のご注文は直接（一財）日本青年館 編集部 まで
〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4-1 TEL 03 (6452) 9021 FAX 03 (6452) 9026